

桜蔭俳話会 九月句会 (第三五八回)

平成二十九年九月二十四日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

兼題「秋場所」

推薦する句

直葬のたましひ何処秋燕

かほる

【鑑賞】

「直葬」の意味するところを知れば、句が圧倒的なものとして立ち上がる。去って行った燕は故郷に帰りつけたのであろうか。

『アラート鳴りし列島秋没日

明美

【鑑賞】

正確には警告が出たのは「没日」の時間帯ではない。戦後奇跡の復興を遂げた日本は世界2位の経済的地位から転落し、今は上空を隣国のミサイルに蹂躪されている。この落差を言うために敢えて「秋没日」を使ったのであろうか。

一考を要する句

秋澄めり藍一色の個展の絵

明美

【理由】

絵の形容に藍一色としている。藍は秋に似合う色であるから、この色の選択は良い。しかし、「個展の絵」とまで念押しすることはない。美術作品は絵か彫刻あるいは写真等であろうから、「一個展」とするだけで良い。誰の個展で、どのような内容の個展であるか読み手に推測の余地を残すことも大事。

【添削例】

秋澄めり藍一色の一個展

盆の家軋む廊下の拭き掃除

かほる

【理由】

よく観察された具象性に富んだ一句であるが、作者自身が行った「拭き掃除」のことまで言うとは、少し情報の盛り込み過多となる。その家の人が日常拭いていることにして。

【添削例】

盆の家軋む廊下の拭かれあり

四十年ぶりの再会嬉し秋彼岸

ヤエ子

【理由】

俳句では、作者自身の感情はダイレクトに述べない。読み手に感じさせれば足りる。

【添削例】

四十年の月日の隔て秋彼岸

「化粧の間」の庭に声あり松手入

友子

【理由】

作者は折角「化粧の間」という雅な実在を手にしたのに、松手入の植木職との間に「庭」という夾雑物を入れている。手入れ対象の松が庭に植栽されているの明らかであるから、松手入というだけで庭の存在も言っているのが、蛇足である。

【添削例】

「化粧の間」よりの一声松手入

鳩集う轆かれて粉の団栗に

真壽

【理由】

時間をかけて読めば分かるが、「鳩集う……団栗に」は分かり難い。主語と目的語は接近させて置くべきである。

【添削例】

轆かれたる団栗粉々鳩ついでめり

秋空にジオラマとなる離宮かな

才美

【理由】

俳句では「…となる」との表現は可能な限り避ける。ジオラマは使いたい言葉。

【添削例】

ジオラマより離宮とび出す秋の空

右手スマホ左子の足秋の駅

ヤエ子

【理由】

右手のことを言えば左手のことも言いたい。スマホは、高機能携帯型電話であるが、スマホの略称は既に電子辞書では市民権を持っている。名詞に春夏秋冬の文字を付けること、すなわち、秋の駅は、少し安易か。

【添削例】

右手スマホ左手に吾子霧の駅

直売の不揃の茄子笑みてをり

【理由】

ツル子

笑っているのは買物に来た作者なのであるうか、風に吹かれた茄子の皮に傷が笑っているように付いている様を言っているのか。普通は山盛りの茄子を直売所に見つけた前者。季語は秋にする。

【添削例】

不揃ひにあれど山盛り秋茄子

知床湖の逆さ連山薄紅葉

【理由】

友子

言葉の整理・省略が必要。

【添削例】

知床の湖の逆しま薄紅葉

鉄塔の四羽の鴉秋気澄む

【理由】

ヤエ子

個数の俳句は種々あるが、本句の四羽は効いていない。

【添削例】

鉄塔に遊びし鴉秋気澄む

秋空に平和の鳩や防衛大

【理由】

直子

行ったことのない人には判らないが、ある部分では防衛大も普通の大学の面を持っている。

【添削例】

天高し防衛大のグライダー

墓洗ふダークマターの在りにけり

【理由】

かほる

この作者の斬新な視点には、何時も感心させられる。ダークマターを使いこなすのは難しい。

【添削例】

墓洗ふダークマターに呼ばれをり

真鯛の硬き腸描くなり

【理由】

ヤエ子

描くなり、が月並な表現。そこに存在するから、描

く対象となっているに過ぎない誤記された「猫」の方が良い。空腹な野良猫はどんな物にも飛びつく。

【添削例】

真鯛の硬き腸野良の猫

みちのくに辿りし一揆露万乃木

才美

【理由】

「辿りし」は月並な旅吟の宣言。今どき一揆は無いから、作者が一揆のあった場所を訪れたことは明白。

【添削例】

みちのくの一揆の一つ露万朵

(文責：代表 増田守 欠席投句：古野明美、

稲葉幸、荒木ツル子)